

バングラデシュ南部避難民医療支援事業 活動報告書

大阪赤十字病院 中央手術室看護師 小濱千恵

派遣期間 2025 年 8 月 9 日～11 月 18 日

派遣地 バングラデシュ・ダッカ及びコックスバザール

2017 年 8 月、ミャンマー・ラカイン州での暴力行為を逃れるため、多くの人々が国境を越えてバングラデシュ南部へ避難し、その数は 70 万人を超えます。発生から 8 年が経過した現在も人々の移動は続いており、以前からの避難民を合わせると、約 114 万人が避難民キャンプで生活しています。故郷に帰る目処が立たず、先の見えない状況の中で日々の暮らしが続いています。

私は日本赤十字社バングラデシュ代表部の事業管理要員として派遣され、活動する機会をいただきました。現地では日本赤十字社(以下日赤)がバングラデシュ赤新月社とともに避難民キャンプ内の診療所や地域保健活動などを支援しています。今回の派遣を通じて見えた現地の状況と私自身の活動についてご報告します。

避難民キャンプで出会った人々

コックスバザールでは事業内容を具体的に把握し、代表部の業務が現場の活動にどのようにつながっているかを理解するため、診療所、地域保健活動などの活動現場を訪問しました。

キャンプ内を歩くと、8 年という時間の積み重ねが見えました。かつて砂地であった場所にはレンガが敷き詰められ、道が整備されています。木々が植えられ、日陰ができています。土砂崩れが起きていた斜面には、階段状の舗装が施されていました。これらの中には様々な国際機関の支援を受けながら、避難民自身が整備したものもあります。不安定な状況の中でも、人々は自分たちの暮らしを少しずつ作り続けていました。

地域保健活動では、現地ボランティアが避難民キャンプ内の世帯を訪問し、感染予防や生活習慣病予防などの啓発活動を行っています。私は現地ボランティアとともにキャンプ内の世帯訪問に同行しました。その日は気温も湿度も高く、私は何度もハンカチで汗を拭っていました。すると、訪問先の子どもたちが私たちの様子に気づき、扇風機を出して風が当たるように向けてくれました。顔に当たった柔らかな風が今も忘れられません。何気ない行動でしたが、自然に人を気遣えるその姿が印象に残っています。

その子どもたちの中には、幼い頃に家族とともにミャンマーから避難してきた子も、避難民キャンプで生まれ、故郷を知らずに育っている子もいます。キャンプには日々の暮らしがあり、子どもたちが成長していく場があります。しかし同時に、その暮らしは、先の見えない不安定な状況の中で続いています。支援を継続することの意味を、子どもたちの姿を通じ

て改めて感じました。

世帯訪問では、ボランティアが一方的に説明するのではなく、訪問先の女性の話に耳を傾け、その思いや生活状況を受け止めながら対話を進めていました。地域保健活動は単に知識を伝える場ではなく、人と人との関係の中で成り立っているということを実感しました。

訪問中に話をしたボランティアの一人も、8年前に家族とともに避難してきた避難民です。「はじめは家族を守るために参加したが、その後は周囲の人の助けにもなりたいと思い活動を続けている」と話してくれました。避難生活を送りながら地域のために動き続けるその姿から、この活動が住民一人ひとりの力によって支えられていることを学びました。

代表部での業務

私が担当した代表部業務は、日赤本社との連絡調整、安全情報の確認と共有、物品調達、広報対応などです。現場で活動する要員からの情報や関係機関とのやり取りをもとに、現地の状況を本社へ共有し、必要な判断や支援につなげられるよう努めました。普段の看護業務とは異なり、事業を後方から支える業務が中心で戸惑うこともありましたが、コックスバザールでの現場訪問を通じて、日々の連絡調整や安全管理の積み重ねが現場の活動を支える基盤になっていることを実感しました。

広報活動では、現地の状況や活動の様子を伝えるため、本社やバングラデシュに派遣されている要員と話し合いを重ねながら、掲載する写真の選定に取り組みました。写真の選定では、支援の現場で生きる人々の表情が伝わるものを意識しました。文章では、事実を正確に伝えることを基本としながら、難しい言葉を使わず誰にでも伝わる表現を心がけました。日赤の事業は、皆さまからのご支援によって成り立っています。いただいた支援が現地でどのように活用されているのか、また、現地でどのような活動が続けられているのかを伝えることは、支援への理解を深め、今後の継続的な支援につなげていくうえでも重要です。

派遣を終えて

派遣期間中、多くの方々のご支援とご協力のもとで活動できたことに、心より感謝申し上げます。今回得た経験を今後の活動に活かしていきたいと考えています。

避難民キャンプで出会った子どもたちや、地域を支えるボランティアの姿を思い返すたびに、支援を継続していくことの大切さを感じています。114万人という数字の背後には、一人ひとりの暮らしがあります。その一人ひとりを見つめることを、これからも忘れません。



避難民キャンプ内のレンガで舗装された道



世帯訪問で出会った子ども達



避難民キャンプの住居



ボランティアが世帯訪問する様子



ボランティアから話を聞く様子



ボランティアの世帯訪問に同行